

# 友だち100人できるかな

ミニコミ誌「みんなつど」6年目に突入

東京・Mさん撮影



一句「各駅停車で女を愛す放浪の光源氏になりたい ないゆき」



「♪いちねんせーになったーらー、いちねんせーになったーらー、ともだちひやくにんできるかなー」。あけましておめでとうございます。ほっこりアイデアチャンネルマイカー常務で、smoking「浄化」erの天地成行（てんち・なりゆき）です。昨年はいろいろなことがごちゃ混ぜな世の中でした。パリオリンピックやノーベル平和賞で日本は素晴らしいことがありながらも、政治の事や社会の事など、生きにくい世の中には変わりなく、さらには世界の混乱も明るい兆しがまだ読みづらいものがありますね。今年もよろしくお願い奉（縦祭）り、横祭り、斜め祭ります。個人的には、日本赤十字社に入社されながら、ご公務もばっちりこなされていた、愛子さまにとっても好感が持てました。ご無理なさらさらず、でも、頑張っていたいただきたいと思えます。

昨年十月に出雲市で見つけたスサノオタクシーさん。ナンバーすべて「777」。2025は良い循環の確率変動に入るかもしれませんね。なんてったって「風の時代」。価値観が物質的なものから精神を満たしていく方向へ。今年後半の朝ドラは小泉八雲の妻・セツさんが主役。令和の日本に語りかけるテーマが気になりますね。それでは、みんながつどえるミニコミ誌「みんなつど」。51号はじまります。





古墳に (広島・Mさん)

おもわず  
コーフィン



AIボーナスに (山口・テンチナリユキ)

みんつど  
51号

tenchi2020@outlook.jp

天地成行・編集



【今月の独り言】  
○人生はトンチだ

真面目に生きすぎる人には  
このくらいの気持ちで生きて  
いてほしい。ちなみに展  
開すれば、人生はウンチだ。  
アンチもピンチもランチでな  
んとかなるでしょう!?



# 「翔平リンゴ」はドジャース次第か？



年の瀬恒例の、東京の市場から仕入れたリンゴ。今年  
は岩手のJAいわて花巻の「サンふじ」だ。以下、「夢の  
ある会話」？ を仲卸の方としてみた。

てんち「すごいですねー。一ケースに26玉級の超大型。  
これは会長、岩手の花巻ということで、大谷翔平を意識  
しましたね？ 去年は、青森のブランド「福ちゃん」を  
購入させていただきましたしね。今年、作柄がリンゴ  
も大変だったでしょう？」

仲卸さん「そうなんです。大変です」

てんち「……そうだ、それなら、これ17玉球という形  
で大谷翔平選手にかけて、『翔平リンゴ』にしてはどう  
なんでしょうかね？ 花巻東高校ご出身ということで」

仲卸さん「はい、天地さん。ではドジャースに交渉よろ  
しくお願いします」

※来年もしそんなブランドができていたら、それは…



天地成行の作品をご覧ください

# コーファンとギファン



本紙二面、  
天地成行さんの  
コーファンと  
いう言葉を見  
て、シファン・  
ギファンという  
言葉を思い浮  
かべました。

ファンはファンでも、天地さんが阿東つばめ農園の無農薬玄米を井に四杯食べたあとのダツプンのファンではありません。ひとり脳内会話の「あり方委員会」に出てくる天地成行ジーさんの「フンガー！」のファンに近いのかもしれない公憤・私憤・義憤です。

津和野の人・森林太郎さん(鷗外)が、こんなことを書いていたのを思い出しました。ドイツ語やフランス語にはあるけれど、日本語にはない言葉について。明治の末に書かれた「當流比較言語學」というエッセイは、次のように始まります。

或る國民には或る詞が關(か)けてゐる。

何故關けてゐるかと思つて、よく／＼考へて見ると、それは或る感情が關けてゐるからである。

以下、勝手に要約します。ドイツ語にあるStreberという言葉。私はドイツ語を習わなかつたけれど「頑張りや」というような語感らしい。努力して前進することはなにも悪くはないけれど、そうやって実力を越えるポストにつかされたら、『ピーターの法則』(ダイヤモンド社)でピーター先生がいうとおり、本人もまわりも辛いでしよう。新婚旅行に行くカップルにまで「頑張り」と声をかけるのは、以前落語で聞きました。たしかに可笑(おか)しい。だから、ゼミで面接の練習をする大学生には、「リラックスして日頃の実力が出せるようにしよう」といつも言いました。

鷗外のエッセイで次に出てくるのはEntsagungというドイツ語。「義憤をすけしからん」という発言は、日本では新聞からSNSまでいたるところにあるけれど、それを口にするのはドイツ

人には気恥ずかしい。「あなたがたの中で罪のないものがまず石を投げなさい」というイエスの言葉が耳に響くからです。天地さんの「みんつど」がどの記事も安心して読めるのは、世の中の困ったことにさじを投げることはあつても、石を投げないように編集されているからだ。私はおもつています。私も、宮本常一先生との共著の『調査されるという迷惑』(みずのわ出版)で、地域の人から石を投げつけられた痛い経験を主に書きました。

鷗外のあげた最後の例も実に面白い。



世の中から「可笑しな人」「変人」と言われるのを、むしろ勳章のように思っている私ですが、天地さん編集のみんながつどえる新聞「みんつど」が出始めたころ、僭越ながら天地さんの文章に申し上げた意見は「自分から笑わないうで。上手な落語家や喜劇俳優は、自分ではくすりと笑わないのに、客は笑い転げている」というものただひとつでした。

も一つ今の日本人に關けてゐる詞に就いて簡単に話さう。

外でもない。Sich lächerlich machen といふ獨逸語である。尤も獨逸には限らない。Pose, poseur なんぞといふ佛語を必要上から出したから、佛語で同じ事を言つて見れば、  
se rendre ridicule である。

Lächerlich 〆 ridicule も可笑しいといふことである。然るに自分を可笑しくするといふ詞が日本には無い。人に笑はれるといふと、大相意味が軽くなつてしまふ。世の物笑へになるなどといふ詞が古くは有つた。これは稍々似てゐるやうだが、今はそんな詞も行はれてゐない。

西洋人は自分を可笑しくすることをひどく嫌ふ。それだから其詞がある。日本人は自分を可笑しくするのが平氣である。それだから其詞が無い。

義憤なんぞが好い例である。義憤の當否は措いて、何に寄らず、けしからんけしからんを連發するのは、傍から見ると可笑しい。日本人がそれを構はずに遣るのは、自分を可笑しくすることを厭はないのである。(後略)

ボランティアのみなさんのおかげで、これ以外にもたくさん作品が、すべて無料公開で広告もないインターネット図書館の「青空文庫」で読めます。その中には、風邪をひいて乾いてしまつた心をうるおしてくれるものもあるかもしれません。

引用・森林太郎「當流比較言語學」『東亞の光』第四卷第七號 一九〇九



越年したごちゃごちゃした悩みは、みなさん持ちたくありませんよね？

このほど、統合失調症当事者の方からSNSの公的な場での、精神疾患者と支援者の少し「難しい」問題が寄

せられました。このことをお二人の精神保健福祉士の資格を持たれる学者さんにつけてみました。以下に回答をいただきましたので、悩みと併せてご紹介してみます。みなさんはどう思われますでしょうか？

# 統合失調症者はLINE交換NGですか？

そうですか。というか、多くの地域の事業所には、後輩が実践をしておりますが、ライン禁止令というのは、あまり聞かないですね。もしかしたら、過去に、誰かが傷ついたようなことがあったのかもしれませんが。そこは、支援者側の背景も聞きたいですね。

一方で、人は基本的に自由を求めますので、そこが奪われそうになると、抵抗するのは世の常です。

**日本福祉大学福祉経営学部教授 青木聖久先生**

というか、当たり前にはラインはしたいですね。

みなさん、大人ですし。暮らしにおいて、支援者は、見守る形の支援になればいいですね。これらを踏まえ、大事なことは、禁止の有無よりも、建設的な対話。これらの積み上げこそが、開かれた組織になるように思います。

応援しています。

今回のご質問について…

本当にナンセンスですね！びっくりです。どうして管理したがるのでしょうか。たとえトラブルがおきたとしても、それを乗り越える経験も必要だと思うんですが…。

**長崎国際大学人間社会学部講師 足立孝子先生**

県立病院で勤務していたころ、患者さんに自分の携帯番号を教えることは厳禁でした。でも、私は自分が担当している患者さんの多くに携帯番号を教えていました…。だから、未だに連絡があって、つながっています。いやな思いをしたことは一度もありません。

……答えになってますかね～

## 質問

悩みをきいてください。地域活動支援センターの、ベテランのスタッフの方が、メンバー間のLINE（ライン）交換はほどほどにしとかなないと、ライン交換禁止令を出さんといけんようになるとか、言われてました。職場、趣味の集まり、労働組合では「連絡先交換禁止令」とかはありえませんが、天地さんのように一般常識に精通した社会経験豊富な当事者もおられて、多くの職場にはひきこもり歴の長い健常者もおられて、一概に当事者、健常者とも線引きは出来ないのですが、ラインの交換くらいとも思いますが、揉めたりトラブルになる人も一定数おられるのでしょうか。何がいいのかよくわからなくなってきましたが、今日地活スタッフのライン禁止みたいな話が腑に落ちなかった次第です（s）

# 「自己」について書くということ——天地さんの創作活動について

天地さんから、自分の書いているものについて評論してほしい、という趣旨のご依頼をいただく。なかなか難しいお題である。私は普段、いわゆる、「実証的な」研究に従事しており、テキストを批評するのは得意ではない。さりとして、「書けない」とお断りするのにも恥ずかしい。そこで、的外れな議論になるリスクを引き受けつつ、思い切って理屈っぽいことを書いてみることにした。以下、素人の習作で恐縮だが、しばらくの間、天地成行論にお付き合いいただきたい。

前置きが長くなったが、ここからが本題である。「みんなつどブログ」の記事（エントリー）をもとに天地さんの創作活動を読み解こうとするとき、筆者が注目したいのは「自己」についての語りである。「ブログ」（＝Web Log）である以上、当然といえば当然だが、「みんなつどブログ」でも、記事の中心は普段の生活からイベント、過去の出来事も含め、その多くは天地さん自身についての内容が大半を占めている。そして、このブログの更新速度は極めて速い。さらに、天地さんの著書も、基本的には自身の経験や自己の形成と関連する内容である。こうしたことを総合すると、天地さんの創作活動のかなりの部分は自己を語ることから成り立っているといっても過言ではない。

「自己」は、私の専門とする社会学が古くから関心を持ってきたテーマでもある。自己に関する学問といえば心理学ではないか、と思われ方が多いかもしれない。しかし、人間の自己は決して自己だけから生まれてこない。このことは、シングル牧師が育てたアマラとカマラの例（批判も多いので妥当な例ではないかもしれないが・・・）もそのことを証明している。人間の自己形成には、他者の存在が必要不可欠である。自己と他者の間には当然、コミュニケーション、相互作用が生じる。したがって、自己は社会学の対象となるのだ（社会学における自己論に関心をお持ちの方は、ぜひ、この分野の最も重要な古典であるG・H・ミード『精神・自我・社会』を手にとっていただきたい）。

さて、天地さんの創作活動（≡自己を語ること）を、社会学的自己論から見たときどのような発見があるだろうか。そもそも、社会学には、「物語としての自己」という概念が存在している。私たちは、自己を何か安定した実態で、普遍的な本質をもつものと考えたことがある（赤子の魂百まで）。だが、現実の自己はそれほど安定したものではない。むしろ、私たちは他者との関

係に応じて自己の役割を演じ分けている（ゴフマン『日常生活における自己呈示』）。会社では部下に優しい上司が、子どもに対しては大変厳しい母親であるということもままある。ということは、幅広い他者と関係を持つようになれば自己は多元化し、統一性（アイデンティティ）を維持するのは難しくなっていく。

「物語としての自己」に話を戻す。この概念は、その言葉通り、自己を何か具体的な実体としてではなく、観衆（オーディエンス）に対して語られる物語として捉えるという意味である。「私とは何者か、それは私があなたに語る私の物語だ」というわけである。物語であるからには結論があり、そこに向かって収束するよう、途中の出来事は取捨選択され整除される。結論が変われば（語る時期、場所、相手が変われば）、当然、選択される出来事やその意味付けも変わる。

以上の視点から、「みんなつどブログ」をのぞいてみる。するとそこで語られていることの核心は、様々な縁をつなぎ合わせによって表現者としての骨格が形成されてきた過程のようにみえてくる。

「天地成行は誰とどうつながり、いかにして現在のようになったか」、これこそが天地さんの創作活動の軸をなす最大のテーマではないか。逆にいえば、天地さんは一般人（実際にはそのような人間はいないのだが・・・）に比べて、自分について語りたいという強い欲望を持っている。そのことは、病を含めこれまでの経験と深く結びついているのだろう。もしかするとそれは、分散してしまいそうな自己を、一つに留めようとする活動なのかもしれない。

下手な「精神分析的」分析は、これくらいにしよう。最後に補足しておく、私たちの社会で自己について語りたいのは天地さんだけではない。SNSの流行を考えれば、むしろ、天地さんは控えめな語り手といえるかもしれない（そういえば最近ある社会学者が編者となって分厚い生活史の本が連続して刊行された）。ただ、SNSで語られる自己は、スペックを盛るために飾られた自己だ。これに対し、「みんなつどブログ」の記事に登場するのは、あまり普段着の天地さんだ（たまに余所行き服の時もある）。表面ばかりが美しい虚飾の社会は冷たく、かわりを拒む。一方で、「みんなつどブログ」はかわりを求めている。同じWeb上における自己呈示であっても、そこには本質的な差異があるように思う。（**國學院大學 観光まちづくり学部准教授・松本貴文**）

國學院大學准教授・松本貴文先生





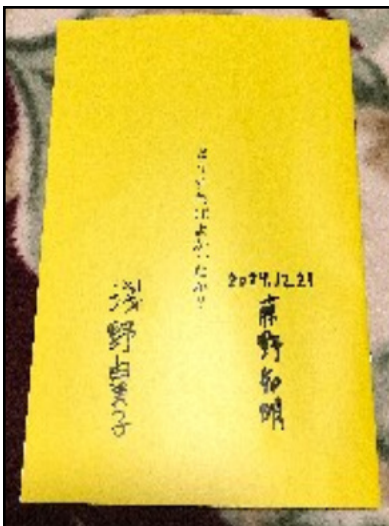


神在月で神々が全国から集まり、山雲大社で会議後にここで  
香み会(直会)が行われる万九千神社(鳥根県出雲市)

幸よ多かれ



夢枕で川底から出現したお地藏様。  
原爆を直前に予言し、いまでも地域を守る。  
(長崎市上町の延命地藏・安溪遊地撮影)



5202



統合失調症のドキュメンタリー映画「どうすればよかったか？」  
浅野プロデューサー◎と藤野監督あいさつ(広島・瀬川シネマ)  
この話題作がこれからの精神疾患の啓蒙に役立つことを願う



須佐神社の大杉。加賀藩が金800両で帆柱に譲ってほしいというのを  
須佐国造が断固断ったとある(鳥根県出雲市)